

第38回 「生命のメッセージ展」 ライフリンク 初めての出展

～理不尽に生命を奪われた者たちへのレクイエム～

2006年9月19日

プロジェクトリーダー 福山なおみ

出展のねらいは、ライフリンクの存在や活動を知ってもらい、“つながり”をもつことから活動の輪を広げることでした。今回の出展は、主催会場（稲城）の実行委員会のお一人である日野市議員の菅原直志さんのお声かけにより実現できたものであり、そのご好意に心から感謝申し上げたいと思います。このプロジェクト3名（福山・南部・村越）の3日間をお伝えします。

協力

稲城市商工会、被害者支援を創る会、全国交通事故遺族の会、NPO法人ライフリンク、NPO法人ジェントルハートプロジェクト、交通事故調書の開示を求める会、おおさか被害者支援センター・マーガレット、杉並区、日野市、内閣府 以上10グループ

プログラム

- 初日(15日)オープニングセレモニー、119名のメッセンジャー(生命を奪われ方々)への黙祷、稲城市市長・稲城市教育長・実行委員長・メッセージ展代表挨拶、シンポジウム
- 2日目(16日)オープニングセレモニー、ご遺族によるスピーチ
- 3日目(17日)オープニングセレモニー、ご遺族によるスピーチ、エンディングセレモニー(次回開催地・宮崎県実行委員長に展示会のシンボルである赤のハート型クッションが手渡された後、赤のハートの風船500個をそれぞれの思いを込めて空に放しました。

メッセンジャーたち

119名(等身大)のメッセンジャーの足元には愛用していた靴やコップが置かれ、肩にはマフラーや背広、帽子、遺族が大切な家族に寄せる思いを著した書籍、花束が添えられていました。その多くは交通事故であり、次にいじめによる自死、一気飲みによる死などいずれも理不尽な死。メッセンジャーの一人ひとりと真正面から向き合い魂に耳を傾け、生命の大切さを感じていました。

遺族たちの背景・スピーチ/私たちにできること

「危険運転致死傷罪」成立のきっかけとなった遺族とその法律が適用された遺族。

「正直に語らない加害者の不誠実な対応」「上司や教師の思いやりのない発言による退職・退学」

「交通事故後の高次脳障害」に病む人と家族が抱える苦悩による自殺念慮。

「飲酒運転」飲むなら乗るな、代行車を使う、飲酒前に店での約束、周囲の人も気を付けて。

「過労による居眠り運転」が原因で発生した交通事故(3日連続の長距離運転、疲れても交代の要求できない組織、高速道路の料金も減額され、自腹を切るしかないという)

- * 遺族の気持ちに心寄せる時間・空間を共有する中で、私たちにはこのような社会の問題に今すぐに取り組み、防止できるということを実感しました。それは、【事故は運転手だけの問題ではない、労務上の問題であり、周囲の人の力で防止できる】また【飲酒運転は周囲の人の力で防げる】【思いやりのない発言による心的外傷体験は周囲の人の配慮で防げる】などです。

このことは同時に、社会的危機による<自殺対策>につながる活動であるといえます。

ライフリンクへの反応とつながり

初出展のライフリンクへの反応は様々でした。立ち止まって見入る人は、「ニュースや新聞で知っています。ここまで(自殺対策基本法の成立)進められたのですね。私たちの活動も実現できるよう頑張ります」、「自死遺族のつどいってこんなにあるのですか」、「あしながのOBです、この本もっています。清水さんに取材を受けました」と。横目で通り過ぎる人に声をかけると、「経済問題は自殺にかかわる問題なのですね」。離れた所で見ている人は「息子が事故後の高次脳障害に悩み仕事もできず死にたいと思うことも・こういう団体もあるのですね」と。また、「自殺の問題は、交通事故の遺族も同じです」、「体験者同士のつながりでやっとメッセージ展にも参加できるようになりました。みんなとつながるって、生きる上で大事なことですね」などの反応から、ライフリンクのいう「新しいつながりが 新しい解決力を生む」を求めていると思われました。しかし、自殺対策に関心を示しながらも具体的な活動となると躊躇する様子が伺えました。ここでつながった「生命の糸」を紡ぎながら、【自殺対策】をできることから始めよう、そう思った3日間でした。